

中国貨幣の歴史

24 宋代の貨幣②—銅銭の大量鑄造とその背景—



けいとくげんぼう
景德元宝
(1004年)



しょうふげんぼう
祥符元宝
(1008年)



ちへいげんぼう
治平元宝
(1064年)



きねいげんぼう
熙寧元宝
(1068年)



げんぼうつうほう
元豊通宝
(1078年)

二代太宗^{たいそう}（在位 976～997 年）の頃に年 100 万貫近くに達した銅銭の鑄造量は、その後、三代真宗^{しんそう}（在位 997～1022 年）以降（景德元宝、祥符元宝、治平元宝など）には年 200 万貫近くにも及び、一時的な減少をみつつも漸次増加していった。六代神宗^{しんそう}（在位 1067～1085 年）の熙寧・元豊期（熙寧元宝、元豊通宝など）には年 300 万貫を越え、ピーク時には年 500 万貫にも達した（写真下は初鑄年）。

宋は、建国当初からの産銅増加策により銅産出量を飛躍的に増大させ、また、銭禁・銅禁^{せんきん とうきん}という政策を徹底し、海外流出^{しやうりゆう}、銷鎔による銅銭の減少を防止するとともに、あらゆる銅・銅器を政府の支配下に置いた。こうした政策により、中国史上、清代と並ぶ最高の銅銭鑄造量を実現し、急速に拡大する貨幣需要に応え、経済発展、貨幣経済の浸透を支えた。

宋は、皇帝専制体制により政治的な統一を進めるとともに、農産物の地方特産化や商品作物栽培の進展などを背景とする全国的な物資流通の拡大を確保し、経済的統一を図るため、流通貨幣の中心であった銅銭の鑄造・発行量の増大と錢貨統一に努めた。宋代における銅銭の鑄造量は、二代太宗（在位 976～997 年）の頃で年 100 万貫（1 貫 = 1000 文）、ピーク時の六代神宗（在位 1067～1085 年）の頃には年 500 万貫に達した。この鑄造量は、平均で年 20～30 万貫程度とされる唐代と比べ遥かに膨大な量であり、中国史上、清代と並び最高とされ、宋代の経済発展、貨幣経済の浸透を支えた。

こうした銅銭の大量鑄造が可能となった背景をみると、まず、政府が産銅をすべて押さえたことである。鉱山は原則官営とし、民間採掘を許可した小規模な鉱山についても税徴収や買取りにより産銅を政府が独占した。そのうえで政府は、採銅専門家を募り新たな銅脈の発見を奨励し、民間に鉱山開発資金を貸与するなど産銅増加策に注力した。さらに、派遣した官吏による産銅量の管理・監督を徹底し、産銅量の増減に対し監督官吏の賞罰を厳正化することにも腐心したとされ、宋代の銅産出量は飛躍的に増大した。

次に、「錢禁」、「銅禁」という政策により、銅銭の減少を防ぐとともに、あらゆる銅・銅器を政府の支配下に置き、国内の産銅と合わせ銅銭鑄造に振り向けることを実現した。「錢禁」は、銅銭の国外持出しと銷鎔を禁止する。唐代末から宋代にかけて外国貿易は著しく増大したが、その中で銅銭は茶、絹、磁器などとともに有力な輸出品として、その範囲は北接する契丹・西夏・金、東方の高麗・日本、ジャワなどの南洋地帯からペルシャなどの西アジアにまで及んでいた。このため建国当初より初代・太祖（在位 960～976 年）は銅銭国外持出しの禁令を定め違反者には厳罰を科し、後には共犯者の処罰、密告奨励なども行った。また銅銭の銷鎔についても詳細な処罰規定をもって規制した。「銅禁」は、「錢禁」を徹底させることを主眼とし、銅・銅器の製造・売買のほか私有・輸出を禁止し、すべての銅・銅器を民間取引から排除し政府の支配下に置いた。「錢禁」、「銅禁」の徹底により、歴代王朝を悩ませてきた私鑄銭も排除された。

さらに、大量の銅銭鑄造を支える鑄造技術も必要であった。錢貨の鑄造は、鑄型を作り溶解した金属を流し込む方法による。鑄型は、石を手彫りする、土を乾燥させて焼くといった方法で作られてきたが、唐代に、製造が容易かつ量産が可能で、質のよい錢貨を鑄造できる「砂型」が開発された。唐代には産銅不足もありこの技術が活かされなかったが、宋代に改良が加えられ産銅の増大とあいまって大量鑄造を可能とした。

こうした銅銭の大量鑄造・発行によって齊一な錢貨への統一が実現されたが、貨幣需要が急速に増大する中では、宋代を通じて「錢荒」と呼ばれる錢貨不足と常に背中合わせの状況にあった。皮肉にも最高の鑄造量を誇った六代神宗の熙寧・元豊期に、宰相・王安石による諸改革の中で錢禁・銅禁が解禁されると、銅銭の海外流出、銷鎔が激増する結果となった。その後、神宗が没し司馬光らの改革反対派が実権を握ると、錢禁・銅禁は復活し、より厳格な取締りが実施され、銅銭の海外流出、銷鎔は減少する。ちなみに、12 世紀後半以降に始まる日本の渡来銭では、この熙寧・元豊期の銅銭が他の銅銭に比べ極めて多い。

[山岡直人、日本銀行金融研究所貨幣博物館]

[参考文献]

- 日野開三郎、『日野開三郎 東洋史学論集 第 6 卷 宋代の貨幣と金融（上）』、三一書房、1983 年
宮崎市定、『宮崎市定全集 第 9 卷 五代宋初の通貨問題』、岩波書店、1992 年
宮澤知之、『中国銅銭の世界—錢貨から経済史へ—』、思文閣出版、2007 年
———、『宋代中国の国家と経済』、創文社、1998 年